



令和3年の年頭にあたり

北海道農業協同組合中央会

代表理事長 小野寺 俊 幸

新年あけましておめでとうござります。

できました。

しかしながら、一昨年から引き組合員並びに役職員の皆様には、コロナ禍にあってもその苦境にも負けず、日々當農に更に邁進されておられることが存じます。

続き、新型コロナウイルスとの戦いが長期化し、今までの日常とは大きく変化した1年でありました。

S D G sへの貢献、信用・共済事業をはじめとしたJA経営を取り巻く事業環境への対応など、北海

を開催し、「北海道550万人と共に創る『力強い農業』と『豊かな魅力ある地域社会』の達成」という将来ビジョンが決議されました。コロナ禍やデジタル化への対応、

一方、十二支の「寅」にも壬と同様で、草花が伸びようとする状態を表しています。この謂われにあやかり、本年が豊穣の年となること、新型コロナウイルスの1日も早い終息と皆様のご健勝をご祈念申し上げ、年頭のご挨拶といたします。

また、地域農業の振興や地域社会の発展に向け、日頃より多大なご尽力をされていることに対しても、改めて敬意と感謝を申し上げる次第であります。

今後は作物ごとの実態を踏まえた、国産・道産農畜産物の需要喚起・消費拡大を図るとともに、外国人技能実習生が入国にも影響があり、農作業の人材確保にも大きな課題となっておりますので、北海道、全国連とも連携し、JAグ

道農業、JAグループ北海道を取り巻く環境が急激に変化しており、このような環境に適応していくには、改めて、協同組合運動の原点である「対話」を通じて、

実践方策を設定し、実践と改善をくり返すことで、変化の波をJA運営に取り込んでいくことが必要であり、組合員・役職員が一丸となつてしっかりと取り組んでいくことが重要となります。

昨年の本道農業につきましては、春先は天候に恵まれ順調に推移したもので、7月～8月にかけての長期間の猛暑や少雨による干ばつ、また、9月に発生した雹や大雨により、一部の地域や作物によつては、生育が大変、心配されたものの、

おおむね平年作を確保することが、昨年は第30回のJA北海道大会

結びになりますが、本年は壬寅年です。十干の「壬」は陽気を下に宿すという意味を持つており、生命の誕生を宿す意味を表します。

